

日本における階級闘争史研究の歴史

はじめに

本稿は、階級闘争史研究の方法論を精密化するために、まず歴史科学における階級闘争論の占める地位をあきらかにし、従来の研究史の到達点と問題点を明らかにするために、戦前・戦後の階級闘争史研究の歴史について考察しようとしたものである。私にはすでに、「日本におけるマルクス主義歴史科学の発達」(永原慶二・山口啓二監修『現代歴史学の課題』上一九七一年、青木書店)、「戦後日本におけるマルクス主義史学に関する覚書」(歴研・日本史研編『講座・日本史』10・一九七一年、東大出版会)、「現代におけるマルクス主義歴史学」(永原慶二編『マルクス主義研究入門』、一九七五年、青木書店)があり、その中で階級闘争史研究についてふれたことがあるが、本稿では、階級闘争史研究のみを対象として詳論した。重復面もないではないが、新しい論考の方が多いと思うので、発表する次第である。

一、歴史科学における階級闘争論の位置

この点を明らかにするためには、次のエンゲルスの指摘が示唆的である。

「マルクスこそ、歴史の運動の大法則をはじめて発見した人であった。この法則によれば、すべて歴史上の闘争は、政治、宗教、哲学、その他どんなイデオロギー的分野でおこなわれようと、実際には、社会諸階級の闘争の——あるいはかなりの明白な、あるいはそれ程明確でない——表現にすぎない。そしてこれら階級の存在、したがってまた彼らのあいだでの衝突は、それ自体、彼らの経済状態の発

展程度によって、彼らの生産、およびこの生産に条件づけられる交換の仕方によって、条件づけられているのである。この法則が歴史にたいしてもつ意義は、エネルギー転化の法則が自然科学にたいしてもつ意義にひとしい……」⁽¹⁾

このエンゲルスの指摘は、『共産党宣言』の次のような有名な指摘に照応するものである。

「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である。

自由民と奴隷、貴族と平民、領主と農奴、同職組合の親方と職人、要するに、抑圧するものと抑圧されているものとは、つねに対立して、ときには隠れた、ときには公然たる闘争をたえまなくおこなってきた。そして、この闘争は、いつでも社会全体の革命的改造に終わるか、あるいは、あいたたかう階級の共倒れに終わった。」⁽²⁾

以上のような指摘に示されるように、マルクス主義にあつては階級社会では、階級闘争が歴史の運動の大法則であり、階級闘争は、歴史の法則そのものといつても差支えない。したがって、階級闘争の研究は、歴史研究そのものに外ならない、といえる程歴史研究上重要な地位をしめるものといわなければならない。したがって、マルクス主義歴史学の研究では、階級闘争史研究は、重要な地位をしめてきた。

しかし、とはいえ周知のように階級闘争についてはマルクス主義が始めてその存在について指摘したものではなかった。この点については、マルクスは「ヴァイデマイヤーあての手紙」で次のようにのべている。

「近代社会における諸階級の存在を発見したのも、諸階級相互間の闘争を発見したのも、別に僕の功績ではない。ブルジョア歴史家たちが僕よりずっと前に、こ

の階級闘争の歴史的發展を叙述したし、ブルジョア経済学者たちは諸階級の経済学的解剖学を叙述していた。僕が新たにおこなったことは、(1)諸階級の存在は生産の特定の歴史的發展諸段階との結び付いているということ、(2)階級闘争は必然的にプロレタリアート独裁に導くということ、(3)この独裁そのものは一切の階級の廃絶への、階級のない社会への過渡期をなすにすぎない、ということを証明したことだ。⁽³⁾

マルクスは、以上にのべたように、階級闘争の発見については、ブルジョア歴史学者の貢献を認め、階級闘争論についての自分の貢献を低くのべているが、これは謙遜でしかないとさえいえよう。この点について、イギリスのマルクス主義政治学者ミリバンドはその近著の中で、「マルクス自身は、この階級的敵対性への関心の集中化にたいするかれ自身の貢献とエンゲルスの寄与を非常に低く評価し、誤解をまねく程軽くみていた。」⁽⁴⁾とのべながら、先のヴァイデマイヤーあての手紙を引用した後、次のようにのべている。

「これは真実かもしれないが(そしてそのなかに幾分かの真実があつても、それ以上のもではない)、にもかかわらず、いわば、諸階級にたいし歴史の登場人物(the dramatis persons)としての、また、階級闘争にたいして歴史の原動力としての信用状を与えたのは、マルクスとエンゲルスであつたし、かれら以前のそれよりも、政治を、階級闘争の特殊的な表出として表現したのは、たしかにかれらである。⁽⁵⁾

「階級闘争に歴史の原動力としての信用状を与えた」のは、すでに冒頭にエンゲルスの引用で示したようにマルクスであつたし、階級闘争論がマルクス主義歴史学の基本的原則である点については周知の合意がなされている。しかも、なお、マルクスが、階級闘争については、自分達以前に、ブルジョアの歴史家や経済学者達が発見し叙述した点を指摘しているのは、その真理性をより客観的なものとして示したいからであつて、単なる道徳的謙遜さにとどまらないであろう。その上で彼等とブルジョア思想家との学説上の根本的相違をここで明示しているのである。ここではプロレタリア独裁に示されるマルクス主義国家学説の本質が示されているが、階級闘争論での相違は、一諸階級の存在は生産の特定の歴史的發展諸段

階とのみ結びついているということ」である。いわば、ブルジョア史家達は、階級対立の歴史の根源に物質的基礎について明らかにせず、階級対立と闘争の現象にとどまっていたのに、マルクス主義は、その本質、歴史の根源に物質的基礎・土台を明らかにした、ということである。

以上の点について、マルクス自身が、どうのべているかをかねて知りたいと考えてきたが、ブルジョア史学の最良の代表者ともいうべきティエリについて、その功績を認めて、「階級闘争」の父」とさえ呼びながら、そのブルジョアの限界を指摘したエンゲルスあての手紙があることを『書簡集』が全て邦訳刊行された結果、我々は知ることができるようになった。そこでは、次のようにのべられている。

「僕にたいへん興味ぶかく思われた本はティエリの『第三身分の形成と進歩の歴史』、一八五三年、だ。とくに興味ぶかいはフランスの歴史叙述における『階級闘争』の父なる彼が、その序文で、現在ブルジョアジーとプロレタリアートとのあいだに敵対関係をみて、その対立そのものの痕跡をすでに一七八九年までの第三身分の歴史のなかに見出そうとしている『新人たち』に腹を立てていることだ。彼は第三身分とは貴族と聖職者をのぞいたすべての身分を包含するものであり、ブルジョアジーはこれらすべての他の要素を代表する者として、その役割を果たしているのだということを証明しようと懸命になっているのだ。……中略

もしもティエリ氏がわれわれの書いたものを読んでおれば、ブルジョアジーの人民にたいする決定的対立は当然、ブルジョアジーが第三身分として聖職者と貴族に対立することをやめたときに、はじめて現われるものだということがわかつたであろう。とはいへ、『昨日生まれたばかりの敵対関係の』、『歴史の根源』に關しては、彼の著書は、その根源が第三身分の成立後ただちに現われたということの最もすばらしい証拠を与えているのだ。⁽⁶⁾

マルクスのこの手紙は、ブルジョア歴史学の最良の代表者ティエリさえもつていた欠陥を明らかにした点で示唆的である。マルクスは、ティエリの功績を明らかにしながらも、ティエリが、「第三身分」そのものを、封建的諸階級——貴族と聖職者——に対立する、ある一つの階級としてまちがって叙述し、すでにこの

時代に、「第三身分」内部に、封建社会の崩壊後に表面化した搾取する上層——ブルジョアジー——と搾取される大衆との矛盾が成熟しつつあったことを認識していない点に、批判を加えている。こうして、このマルクスの手紙は、テイエリその他のブルジョア史学が、階級闘争の現象については叙述したが、この階級闘争の本質——「歴史的根源」——物質的基礎を徹底的に解明することができず、階級闘争が、封建社会にのみ固有であるかのような、せまい理解から脱却することができず、資本主義のもとでの階級対立と階級闘争の本質と性格が理解できなかったこと、そしてそれを解明した点こそマルクス主義歴史学の独自の役割があることを、示しているといえよう。さらに、このマルクスの手紙は、マルクス主義の歴史叙述とブルジョアの歴史叙述の階級闘争に関する理解の相違、ブルジョアの歴史学がその最盛期でさえ示していた矛盾的性格と分析の不徹底さを、明らかにしたものだといえよう。したがって、以上の事はマルクス主義歴史学こそが、階級闘争の分析を徹底的に行い、特にその階級闘争の「歴史的根源」——生産の特定の諸段階を明らかにしたものであることを示すものといえよう。この点は、レーニンによっても次のように確認されている。

「ある社会でその成員中のある人々の志向が他の人々の志向とくいちがうこと、社会生活が矛盾にみちていること、歴史のしめすところでは、国民と国民、社会と社会のあいだにも、それぞれの内部にも闘争がおこなわれているうえに、さらに革命と反動、平和と戦争、停滞と急速な進歩または衰退の時期がかわるがわるにくること——これらの事実は、一般に知られている。マルクス主義は、この一見迷宮と混沌とおもえるものなかに合法則性を見いだせるようにする手引の糸をあたえた。階級闘争の理論がそれである。ある一つの社会または一群の社会のすべての成員の志向の総体を研究してはじめて、これらの志向の結果を科学的に規定できる。ところで、あい矛盾する志向のうまれる源泉は、それぞれの社会をわかっている諸階級の生活上の地位と条件との違いにある。」⁽⁸⁾

こうして、マルクス主義歴史学は、階級対立の生産上の諸段階、生活上の地位と条件を明らかにすることに力を注いだ。わが国の歴史学もそうであり、階級闘争の前提条件である、社会経済的段階の確定に力が注がれ、いわゆる社会構成史

研究が盛になされた。それは、或る意味で、研究の手続きとして、物質的基礎——土台から研究が始められるのは当然のことであろう。しかし、だからといって、それは、始源でしかなく、真のマルクス主義歴史学とはいえないであろう。社会経済状態から階級配置と階級対立が明らかにされ、その点でブルジョア史学の欠陥を克服したとはいえず、ブルジョア史学さえ明らかに叙述した階級闘争の事実の叙述を怠っては、或る意味でのブルジョア史学からの後退とさえいえよう。まして、マルクス主義史学の本領である、ブルジョアジーに対するプロレタリアートの階級闘争を、その物質的基礎をふくめて、分析、叙述しなければならぬ、といえよう。

マルクス主義史学の方法論を練磨するため、わが国のマルクス主義史学の階級闘争史研究の成果、その発展のための方法論の展開過程について以下考えてみたいと考える。

二、戦前における階級闘争史研究の歩み

(1)階級闘争史研究のはじまり

わが国のマルクス主義による階級闘争史の叙述は、日本労働運動の父と呼ばれる片山潜によって始められ、米騒動勃発の直前、一九一八年の「太平洋における武装平和」という論文の中で、日本の農民一揆についての総括を試みた、といわれる。⁽⁹⁾

これに続けて一九二〇年には、山口義三の「階級闘争史論」という著書が、堺利彦・山川均共編のレッド・カパー叢書の4として刊行され、ヨーロッパの奴隷の闘争、農奴の闘争、英国革命、米の独立戦争などが記述されているが、著者自身がその序文で「本書の所論は悉く自分の創見ではない」とし、多くは、オブリオン・リード氏の『古代賤民史』、クロボトキンの『国家論』、モリス、バックスクニの『社会主義の発生及び結果』、アンテルマンの『世界革命論』等に依って「之等の所論をコネ廻わし、所謂他人の種で相撲」を取ったものであり、「著」と名乗るのは汗顔の次第である。」としている。しかし、「マルクス・エンゲルスの書いた

た共産党宣言の言葉を信じている自分は、其の浅学を顧みずして压制階級の手になつた世界の歴史——帝王の歴史、將軍の歴史、政治家の歴史を、被压制階級の、一平民の国を以て観察し研究せんと企てた」ともべており、ヨーロッパでの奴隷、農奴、資本家階級の階級闘争を画き、ブルジョア革命でも、その贊美というより、「清教徒的英雄クローンウエルは商工階級の利益の爲王と貴族を膺懲」したが、農民の共産主義運動を弾圧したことをあばき、ワシントンと「密貿易の利を取めつつある、植民地の狡猾なる商人の代表者」で、「黒人の土地を掠め、黒人を迫害した恐るべき虐殺將軍であつた。」とするものであり、ヨーロッパ史を一応、マルクス・エンゲルスの指摘に基づき階級闘争史として初歩的に記述していた。そこで本書は今日、マルクス主義古代史家土井正興氏によつて、日本の西洋史研究史上最初に、「奴隷制の問題にふれた」⁽¹⁰⁾ 著書として評価されるであらう。

一九二二年刊行の佐野学『日本社会史序論』では、中世以来江戸時代に至つて百姓一揆が純粹な階級闘争的色彩を帯びることを指摘し、約四〇件の一揆の事例が紹介されている。⁽¹¹⁾

『社会問題講座』（一九二六—二七年、新潮社）には、百姓一揆や労働運動、農民運動、婦人運動など階級闘争史の具体的叙述を扱つた論稿が収録され、階級闘争の史実が具体的に記述されているが、テーマとして階級闘争を扱つたという積極性にとどまり、階級闘争史研究的方法論的には注目すべきものは少ないといつてよい。その中で西雅雄「階級闘争史」が、西自身のがべているように「階級闘争史序論」として、マルクス主義の階級闘争史の理論の一般的整理を行つており、後に単行本された点で注目し得る。ここでは、「序論一階級とは何ぞや」に続けて——マルクス・ブハーリン・レーニンの客観的存在としての階級の定義をあきらかにし、「一、階級の発生と消滅」、「二、階級対立と階級闘争」を説き、ブハーリンの史的唯物論の理論を参照しながらここで次のように述べている点が注目される。

「単に階級が対立して存在するといふことと、階級意識の存在、又は階級闘争の存在とは別個の事実である。マルクスはこの単なる客観的存在としての階級を“Klasse an sich（自己に対する）”といひ、すでに自己の社会的役割を意識した、階級を“Klasse für sich（自己のための階級）”と呼んだ。レーニンが「階級とは闘

争のうちに又発達によつてそれ自身を形成するところの觀念である」といつたのはこの意味である。⁽¹²⁾ ここでは最近渡辺菊雄や私達が方法論として強調した「即自的階級」から「対自的階級」への問題が既に一応指摘されている。「四、階級及び階級闘争の史的発展」の頃では、先ず『共産党宣言』の有名な冒頭の五つのパラグラムを四節に分けて引用して次のようにまとめているのが注目される。

「第一節では、冒頭の『社会の歴史は階級闘争の歴史である。』という一句を説明するために、ギリシア、ローマ、中世の階級対立を簡単に例示し、第二節ではローマ、中世を再び例に挙げて、こういう時代の社会は一つの身分に編制されていたことを説き、第三節に於いては、更に進んで、近代ブルジョア社会には新しい階級対立が生れたことを論じ、最後に第五節に於いては、このブルジョア社会の特色は、階級対立の単純化にあることを述べているのである……中略

ギリシア、ローマ、中世社会と近代ブルジョア社会との間には、階級対立の上非常に大きな差異がある。そしてこの差異は、之を一言にすれば、即ち身分と階級の対立との差異である。過去約三千年に亘つて存在した身分は、近代のはじめ、当時の所謂第三身分（階級）たるブルジョアジー及び其の他によつて、實質的に排除され、その後は本来の階級——経済的地位を直接に反映する階級——が出現し、これが愈々益々大陣営に分裂しつつあるのである。……中略

然らば、古代及び中世に於いては身分の他に尚ほ本来的な階級があつたのではないか、という疑問が起るかも知れぬ。然し、決してそうではない。當時に於いて身分と階級とは一致していた。然し當時に於ては土地が主要なる生産手段であつて、人間生産力の発達は遅々たるものであり、従つて階級は比較的安定されていた。それだから、数千年の久しきに亘つて、地主は常に経済的支配階級（土地貴族）であり、農民（奴隷、農奴、自由農民）は常に被支配階級であつたのである。農民の身分が奴隷、農奴、自由農民というように変化することは、それだけ土地に於ける人間生産力が発達したことを物語るものであるが、それは尚数千間に於ける進歩であつて、この階級の経済的内容はまだ身分の法律的外被を打破するに足らなかつた。然るに近代に至つて、……農業及び殊に工業に於ける生産力が急激に発達するや、この内容と外被、身分と階級とは到底一致し難くなつ

た。権柄は打破されなければならず、又打破された。そしてこの革命的役割を背負うて立ったものは、即ちブルジョアジーを先頭に載く所謂第三身分であった。

そして第三身分は自らを解放せんがためには、すべての身分を廃絶するより外に道はなかった。『ブルジョア革命は身分をばその特権諸共に廃絶した。』ブルジョア社会は階級を知るのみである。』(旧仮名は新仮名に変更・傍点大丸)

ここでは、戦後のマルクス主義史学で前近代史では石田正氏らが「身分」と「階級」の関係の究明の必要を強調しているが、その問題も既にこの西論文に先駆的に指摘されていたことに注目しておく必要がある。

(2) 『マルクス主義講座』

『マルクス主義講座』(一九二七―八年上野書店)には罷業史の紹介はあるが、階級闘争史の問題を直接扱っている論文は、横瀬毅八(対馬忠行)「日本無産階級運動発達史」(第十二、第十三巻)ぐらいであろう。この「はしがき」はマルクスの『哲学の貧困』中の、その後、渡辺菊雄氏や私などが方法論的に依拠した「即自的階級から対自的階級へ」の発展の部分を一頁半にわたって引用し、レーニンの今日では有名な「社会主義党と無党派革命運動」の一文から次のように引用している。

「階級の対立に基礎を置いてゐる社会に於て、相敵対する階級の中の闘争は、必然に政治闘争に変化する。政治的階級闘争の最も完成した、統一的な形態は党と党との闘争である」の部分に次に引用して、次のようにのべている。

「思えば、我が日本プロレタリアートの階級的自己結成——それが「資本に対する一つの階級」たるにとどまらず、「自らに対する一の階級」への結成、転化——の芽生えは、漸くかの第一次帝国主義的世界戦争の前後頃に置かれたのであった。そこで、はじめて、『単なる労資の維持』——ストライキ・聯盟から『組合の維持』——近代的な型の労働組合が成立しはじめたのであった。……中略……それは階級的自己結成の端初——単なる組合的闘争——の段階を脱して、一九二二年後半期頃より、政治的階級的闘争へ転化し発達した。しかも本年——一九二八年——三月十五日並びに四月十日の、日本ブルジョアジー・地主権力を代表した田中政友会内閣の××××並びに左翼三団体に対する強襲、××××××××、今や我

が××に於ける××××が『政治的階級闘争の最も完成した、統一的な形態』たる「×(党)と×(党)との闘争」——しかも公然たる——にまで突き進みはじめていることを最も尖鋭に、且つ血の文字を以って描き出したのである。』¹⁷⁾

このような方法論の上に立って、階級的政治的闘争の段階に達した時期を日本共産党結成の一九二二年後半期としている。そして、それ以前の『前史』を「あまり重要でない」としている。

(3) 小川信一「日本に於けるプロレタリア運動の発生」

プロレタリア科学研究所で日本の無産階級運動史についての研究を行ったのは、小川信一(大河内信威)であった。それは『プロレタリア科学』誌創刊号より三回連載で未完に終わった小川「日本に於けるプロレタリア運動の発生」であった。

その『プロレタリア科学』創刊号——一九二九年十一月号掲載の「一、はしがき」でその方法論について、横瀬氏を批判しながら次のようにのべている。現在忘れられているので少し長い引用を行う。「プロレタリア運動史に於て、最も重大な問題は、党の成立とその発展である。所が在来の日本プロレタリア運動史の大部分は、此の党の成立と発展とを除外し、或は意識的に抹殺して居た。それ故に運動史は、真にマルクスの方法によっては把握され居ず、現象の粗雑なる羅列にすぎなかつた。僅かに、……横瀬毅八氏の『日本無産階級運動発達史』のみが、党の成立と発展とを取り扱い、爾余一切の運動を党の立場から説いて居るのを見る。併し不幸なことは、氏の「前史」——即ち党発生以前の事実に対する認識は、極めて幼稚であり、間違だらけである。若しも私の憶測に間違いなくんば、氏が叙述に用いられた前史の材料は、現在社会民主主義の陣営に身を投じて居る人々の手によつて書かれたものの中から求められたのに違いない。なぜ私がかく判断したかと云うのに、氏の「前史」内には、日露戦争後、一九〇五年革命の影響を受けて、日本の運動が革命化し、各地にストライキと暴動の起つた事実をば見逃して居られるからである。……中略(明治三四年執筆の片山、西川「日本の労働運動」を種本とした赤松克麿「日本労働運動発達史」の踏襲を指摘)

が、之は、在来の歴史のほんの一部分の缺陷に過ぎない。もっと重大な事は、

党成立以前の歴史を如何に解釈するかと云う問題である。党の成立と発展とを書き得ない、社会民主主義者の運動史は、党以前の歴史も、党成立以後の歴史も本質的に何等異なる歴史である。……

之に対して横瀬氏は、初めて党成立の歴史と、それ以前の歴史とを区別された。併し前史に対する解釈は、在来の社会民主主義者のと少しも変りないのである。

……中略……

で私は問題を明瞭ならしめる為に、二つの疑問を提出しよう。

第一は三十年代の諸社会主義政党の本質は何んであったか云う事である。……明治四十三年の大逆事件から大正十四年迄は無党時代である。……若しも三十年代の政党を社会民主主義政党だと解するならば、何が故に二十年近く、日本のプロレタリア運動は、政党を有しなかつたのであろうか。……

第二は、日本のプロレタリア党発生の出発が、何故にアナキズムとの対立によつて行われたか？ 何故に日本にはアナキズムの全盛期があつたのか？ と云う事である。大正十一年九月の『全国労働組合総聯合』創立大会を最高潮とせる華々しきアナキズムの活躍は、横瀬氏の云はるる如き単なる『虚花』的存在であらうか。……

之等総ての疑問は、事件を並列する在来の方法によつては何等解決の出来ない問題である。ことに在来の史家は、大逆事件を利用して三十年代の運動と其の以後とを巧みに分離して之等の起る原因を誤魔化して居る。⁽¹⁹⁾

以上のように、在来のプロレタリア運動史研究の批判を行つて後、次のように小川氏は積極的に同運動史の発展段階についての問題提起を行う。

一、明治十六年の車界党成立から同三十九年の日本社会党発会式に至る迄。

一、明治末年から、大正十一年の全国労働組合総聯合に至る迄。

一、大正十一年より現在に至る迄。

第一期は、日本のプロレタリア運動の発生期であり、ブルジョア民主主義運動からの分離時代である。

第二期はブルジョア民主主義の機械的否定からアナルコ・サンジカリズムに走つた時代である。

第三期は、真に労働者が階級として結成し、プロレタリアートとしての自己を認識し、自己の政党を要求し初めた時代であり、プロレタリア党が成立し発展する時代である。」

以上の発展段階の時期区分の従つて、その各時代の特徴について、次のような問題の指摘を行っているのが注目される。

「在来と雖も、ブルジョア民主主義運動とプロレタリア運動との関係を見なかつたわけではない。例えば堺氏は、初期の社会主義者が、自由党の左翼と急進的キリスト教徒であつた事を述べられて居られるが、併し何故に、ブルジョア民主主義者の左翼とキリスト教徒がプロレタリア運動の先駆者をなしたかが又その後プロレタリア運動は如何にして彼等から分離して行つたか、三十年代の運動が、プロレタリア運動と云い条、ブルジョア民主主義と本質的に余り異つて居なかつた云う事実を見逃して居られる。此の点を明白にしてこそ、三十年代の無産政党の内容が明らかになるのである。」⁽²⁰⁾

またその上で、明治三十年代の無産政党の性質について、二七年テーゼの「日本の労働者階級の数十年間の歴史をもつ強力なる社会民主的組織を有して居ない。従つて、又そこには何らの根強い社会民主的伝統もない」という規定に従つて、「明治三十四年に安部磯雄等によつて社会民主党が作られた時、その綱領はマルクスの『共産党宣言』中の綱領を直輸入して作られたものであり、しかも党そのものの本質は、ブルジョア最左翼党にすぎなかつたのである。」⁽²¹⁾として居る。

小川のこの論文は、以上の方法論についてのべた「はしがき」に続いて、二回にわたつて明治三十年代のプロレタリア運動について論じているが、三回で未完に終つた。

(4) 白揚社編輯部編『日本共産党小史』

以上の横瀬、小川両論文を批判して、日本プロレタリア運動史の研究を一步進めたのが次のような、白揚社編集部編『日本共産党小史』の記述である。

一、日本共産党の歴史は何時から始まつたか。

「我々は……明治三十四年に近代プロレタリアートの抬頭と共に、片山潜、幸

徳秋水、安部磯雄等によって組織された社会民主党をもって、今日の日本共産党の最初の萌芽と見做すことが出来るであろう。

二、社会民主党——社会主義同盟

小川信一君は、『三十年代の諸社会主義政党の本質は何であったか?』という疑問を提出し、そして、社会民主党禁止後『……二十年近く、日本のプロレタリア運動が、政党を有しなかった理由を説明する為に、単純にも、『党そのものの本質は、ブルジョア最左翼政党にすぎなかった』と断定している。氏は恐らく……』コミンテルンの日本問題に関する決議』を誤解して当時の社会民主党を無理矢理にブルジョア左翼党にしてしまわなければならなかったのであろうが、これは大きな間違いであり、当時の労働運動の状況に対する完全な無智を曝露したものである。……成るほど、社会民主党の綱領はハッキリとしたマルクス主義的なものでなかつたし、その組織も未だもちろんマルクス主義的なものでなかつたけれども、それは当時抬頭しつつあった労働者階級を政治的に結束せしめようとする最初の試みであつた。政治的自由を剝奪されていた当時の事情の下に於てブルジョア民主主義的要求が濃厚であつたのは当然のことである。……

社会民主党は実に我が国の社会主義者と近代的労働者が結合したところの最初の組織だったのである。(社会民主党禁止、社会主義協会復活)此の社会主義協会の流れは、その間に幾多の迂回曲折を見たにも拘わらず、第一次日本共産党の組織に至るまで、細々としているが一条の赤い糸の如く続いて居るのである。⁽²⁾

「横瀬君の見解に従えば、『我が日本のプロレタリアート』が「漸くその階級的自己結成の序曲への途を踏みはじめたのは」、日本が『近代的帝国主義』——金融資本主義へ転化しはじめた「時からであり、『此の期(年代的には「一九一七・八年を境として」、『大工場、巨大な機械……のうなりと共に(それ以前の機械のうなりはプロレタリアートの耳へ入らなかつたものとみえる——筆者)……次第にめざめはじめた』(傍点犬丸)のであり、『われわれはその実証を、大正元年(一九一二年)の友愛会……の創立と信友会(大正六—一九一七年)の創立とに於いて之を見る事が出来る』のだそうである。かくて横瀬氏はそれ以前の労働者の闘争を『めざめざるもの』として凡て抹殺してしまうのである。小川君にあつては、

我が国の労働者が「真に階級として結成しプロレタリアートとしての自己を認識し……はじめた時代」は更に大正十一年まで延ばされてしまう。かくて日本のプロレタリアートは、金融資本主義が確立する時代に至ってやっと、『プロレタリアートとして自己を認識しはじめる』ことが出来たほどにノロマだつた!

両氏は当時の日本に何故ラジカルな革命的理論が生れなかつたか、そして又生れ得なかつたかの社会的根拠を究明するという最も重要な問題をソッチのけにして、単純にも、当時の社会主義者を簡単にブルジョア民主主義者として片付けたり、或はモット悪く、日本のプロレタリアートを全く愚図でノロマなものにしてしまつて居る。⁽³⁾

以上のように、横瀬、小川両氏の見解を批判した上で、「ロシアも日本も共に遅れて資本主義への道を辿り始めひとしく専制的支配の下にあつたにも拘わらず、何故ロシアに早くより革命的な理論を以て武装した党が建設されたのに、日本に於てそれが為されなかつたか?」という疑問を提出して、これにこたえようとする。そして、ロシアの客観的条件として政治的自由がなく農奴的隷属があり、ブルジョア革命前夜で、労働者階級の自覚が急速になされたのに対し、日本ではブルジョアジーが封建的要素と妥協して自己の力を増大させ数次の侵略戦争での勝利は労働者農民を排外主義で眠りこませることに成功し、革命情勢の成熟をおくらせ、又日本のプロレタリアートは「豊富な国際的連絡」(レーニンの『左翼小児病』)をもち得ず、革命運動の世界的経験を豊富に摂取できなかったのに対し、ブルジョアジーが反革命の世界的経験を豊富に摂取できなかったのに対し、プロレタリアートを懐柔、弾圧したとして、次のようにのべている。

「日本のプロレタリア運動は正に此の如き客観的条件の下に成育したのであつた。その『主観的革命状態』が甚だしく遅れて居り、『独立の、思想的に試練を経たる、規律ある中央集権的な党』の発生が、かくも永い間見られなかつたのは、正に此の如き客観的条件に基づいているのである。それを、ただプロレタリアートの未成熟のみを以て説明し去ることが謬りであることは、ロシアの党の発生を考へるだけでも充分である。もちろん共産党がプロレタリアートの党である限り、プロレタリアートの成熟の程度を無視して、共産党の存立、発展を考へるこ

とが出来ないけれども、それは一般論であつて、個々の特殊の場合を説明することは出来ない。

従来我がマルクス主義史家は、恐らくかかる観点に立つたが為に、日本のプロレタリアートが「資本に対する一つの階級」から「自らに対する一つの階級」へと成長転化しはじめた段階を大正元年乃至大正六、七年（横瀬氏）或は、大正十一年（小川氏）として居る。これは、福本氏が彼の理論論争によつて「主体の完成」を成熟させようとして、先にも述べた如く、我が国のプロレタリア運動の成果を一挙にして抹殺した誤謬を無批判に踏襲したものである。横瀬氏がもし我が国のプロレタリアートの前史を「余り重要ではないが（何故重要ではないのか？）などと考えずに、そして事実の単なる羅列で間に合わせてしまう様なことをしなかつたら、氏はかかる誤謬を踏襲せずに済んだであらう。……」

序でに附言するが、横瀬氏の『前史』に対する認識が「極めて幼稚であり、間違いだだけであることを指摘したことは小川君の功績である。しかし小川君の『前史』に対する認識」も亦甚だアヤフヤなものであり、氏の所論には、多くの誤謬と矛盾撞着とが含まれている。⁽²⁴⁾

以上のような横瀬、小川の批判の上に次のように積極的に主張している。

「それは兎も角、日本のプロレタリアートが『資本に対する一つの階級』から『自分自身に対する一つの階級』に自己結成を行ひはじめた時期は、私見によれば、日清戦争後、即ち明治二十年代より三十年代の初め頃である。そしてその実証としては、明治三十年に設立された『労働組合期成会』を挙げることが出来る。それは間もなく、一千八百名の組合員を擁する鉄工組合、組合員三千名より成る活版工組合、組合員一千名より成る日本鉄道矯正会等々を組織したのである。」⁽²⁵⁾

この叙述をみれば、わかるように、一九七〇年頃、渡辺、梅田白欒治氏らと共に私達が到達した問題点が、既に戦前や未熟さをふくみながらも、その基本点は以上のようにのべられた事実を、今回知つて、研究史を無視してはならないことを痛感させられたのであつた。

(5) 日本資本主義発達史講座（以下講座と略称）の諸著作

『日本資本主義発達史講座』では、服部之総「明治維新の革命及び反革命」、平野義太郎「明治維新の変革に伴う新しい階級分化と社会的政治的運動」、「ブルジョア民主主義運動史」、小川信一「労働者の状態及び労働者運動史」、稲岡運「農民の状態及び農民運動小史」、羽仁五郎「幕末における社会経済状態及び階級関係、階級闘争」、「幕末における政治闘争」等の階級闘争史を扱った諸論稿が収録されている。これらの著作の中で階級闘争史研究の方法論として注目されるのは、羽仁、平野、小川の著作であらう。

羽仁の著作は、農民一揆史の研究としては、今日、林基氏によつて、「これまでの研究の最高の包括的な総結である。これらの業績は、戦後の諸研究の出発すべき基盤をなした」（『百姓一揆の伝統』）と評価されているものであり、この羽仁の著作の方法論については定評があり、後に改めてその歴史的意義と限界について述べようと思うのでこの部分では省略する。

1 平野義太郎の諸著作

平野の著作の真髄は、次の記述の中によく示されている。

「農民一揆の本質又は個々の一揆の原因を究めるにあたって、一の騷擾のなかにも幾多の直接的要求が有機的に聯関しつゝ含まれる一揆を、単にその表面的要求のみから推してその一揆の原因と看做し、或は機械的に個々の一揆の諸原因を羅列し、又は羅列せる諸原因の共通部分を帰納することによつては（遠因近因というような小学生風の、又、アネクドッツ以外の何も無い黒正徹『百姓一揆史談』を論外とし、他の、現象形態の表相を横写する経済史・社会史における粗雑な経験主義的歴史派）決してその本質又は個々の一揆のいわゆる原因さえも認識されうるものではない。個々の一揆の性質ととも、それが階級的な闘争であるかぎり、具体的な階級対立における当該地方の農民の地位、ブルジョア革命の諸階段における具体的なそれぞれの行動形態、諸要求、攻撃が加えられた相手方の階級的性質、攻勢の態様・指導的な層などが分析されなくては把握せられ能はぬし、その諸一揆の本質も明治維新の変革の一般的社会、政治諸条件によつて決定される小農民の階級的地点が分析されなくては把握せられ能はぬのであつて、要

は、当時に於ける農民に対する支配隷属の搾取関係と農村を掘り崩しつつあった寄生的商人、高利貸資本とを明治維新の変革過程の経済的、政治的、社会的条件より具体的に究明することである。」(傍点引用者当用漢字に変更)

ここには、「一」で明らかにした、ブルジョア史学の階級闘争論とマルクス主義の階級闘争論の相違を明確に自覚して、マルクス主義の方法論が厳密に展開されているのである。こうした観点から、明治初年の農民一揆の性質があきらかにされている。それだけでなく、資本の原蓄期における労働者と農民の運動の階級的性格も明らかにされており、いずれも先駆的研究をなしているものである。また平野は、『ブルジョア民主主義運動史』でも、自由民権運動を、日本でのブルジョア民主主義革命運動という階級闘争としてとらえる最初の分析視角を示した。それは、戦後、活発化した自由民権運動の諸研究は、この平野の研究とその後「歴史科学」誌で追求した「秩父事件」研究などを、「研究の出発点」としている点で先駆的業績であった。

2 小川信一『労働者の状態及び労働者運動史』

これは、まさに『プロレタリア科学』誌の連載で未完に終わったものを、先の『日本共産党小史』の批判なども恐らく念頭において、近代日本の労働者の形成と労働者運動の発生から、一九二二年の労働者階級の政党が結成される迄の歴史を概括したもので、上、下合計、一四二頁に及ぶもので、これ迄の研究を総括したものと見えよう。

小川は「第二章日清日露戦争と労働者」で、日清・日露戦争による労働者数の増大についてのべた後次のようにのべている。

「かくの如き資本の発展と労働者階級の数的増大は必然に又労働運動を必然に又、労働運動を進展せしめずには置かなかつた。ことに工業労働者の増大は労働運動にとって重大である。漸く階級として結成される基礎を作られるに至つたといつてよい。」(傍点丸)

ここには、「階級として結成される」という観点がみられる点に理論的方法論的意義がある。また次のような指摘も見られる。

「三十年代の労働者の闘争は、在来の労働運動史家の主張する如く、暗黒時代(赤松克磨著『日本労働運動発達史』二二頁、産業労働調査所編『労働年鑑、大正十四年版、五二頁)でもなければ、貧弱なものでもない。ことに日露戦争後の革命化を無視することは、労働者に対する××(侮辱?)である」とのべ産労編『労働年鑑』の「労働争議件数及び参加員表」を明治三〇年から大正元年迄引用している。この典拠は内務省社会局調査の官庁統計による数字であるが、「三十年代だけでもこの表以上の争議が判明して居る」として、具体的な資料を以下あげているのが、理論面のみならず実証面でも研究上の前進をしめしている。

そして、明治三十年代の運動については、次のような評価を行っていた。

「此の三十年代の運動を概観すると、プロレタリアートの異常な力の発展を知ることができるが、日本資本主義がなお生成の過程にあつて、階級分化が急速に進行し、労働者階級はまだ成長発展の過程にあり、階級として、十分に結成して居ない為に、その組織は未だ弱く、反抗は、その大きさに比例して余りに非組織的である。」(傍点引用者)

この規定は、前述の白揚社編集部氏の批判をうけて、それを考慮して上での小川の一応の返答とみることができよう。(以上の小川氏の見解を私は必ずしも全面的に肯定してはいないのであるが、継承に値する部分がふくまれていると考えている。)

以上に続いて第一次世界大戦の日本資本主義の発展、労働者階級の量的増大と質的發展についてふれて、次のようにのべている。

「われわれはそこにプロレタリアートが、階級として成熟し、独自の闘争を展開しうる、経済的な地盤がそなわつたことをみる。三十年代の革命的激化にも拘らず、結局小ブルジョアジーが運動の指導をなした労働者階級は、今や工場労働者の多数を獲得することにより、真に近代的工業に根をおろした闘争を獲得したのである。……中略……」

資本対労働の闘争は、もはや三十年代の闘争とは比較出来ぬ程、激甚化し、意識化し、計画化することが予想せられた。三十年代の如く小ブルジョアジーと結合して、封建的遺制に向つて闘争することより躍進して、プロレタリアートは、

自覚せる階級として反動化せる資本家階級と政権奪取のための闘争を展開する時代に入ったのである。資本主義の埒内に於ては最早何等の要求をも貫徹することが出来ぬ時代に入ったのである。ブルジョア階級の党とプロレタリアートの党が公然と対峙する時代に入ったのである。」(傍点引用者)

さらに具体的に「大正」初年からの労働者の闘争についてのべた後、それに就いて次のように指摘している。

「三十年代の闘争と比較する時、如何に争議・団結上、組織的にも闘争エネルギーの昂揚にも、急速に発展し、成熟して行ったが、驚く他はないのである。かくして、日常利益の要求をたたかえる経済闘争の激烈な昂揚に伴って、かかる部分的経済闘争も全面的な政治的闘争に有機的に発展せしめねばやまぬ労働者階級の成熟は、労働政党を要求する次の段階への用意となるのである。」(傍点引用者)

これに続く、「第三章労働者階級の組織の発展」では、大戦後の労働組合組織の発展についてのべ、「労働組合の闘争化」の項を設けて総同盟の戦闘化、反動的中間的組合、アナ系、官業系の労働組合の成立などと共に革命的労働組合の設立についてのべ、「後年の革命的闘士」が続出し、「総同盟内の革命的分子」と呼応して「プロレタリア運動を促進」し、「プロレタリア運動のマルクス主義的实践」へ進んだことを記述している。そして、最後に「共同闘争に現われた新傾向」として、国際労働会議労働代表問題、メーデーの開始、労働組合同盟会についてのべ、それらを次のように総括している。

「従来全く見られなかった、労働階級の全国的な共同闘争への要望が、労働者階級の自覚と共に生じたのであって、シベリア即時撤兵、治警十七条廃止、労働組合法府案反対にあらわれたごとく、労働者階級の政治的な関心が、著しく高まった事を示すものである。ことに、メーデーのスローガンにさえ、シベリア即時撤兵とか、実論の自由とか、治安警察法第十七条の撤廃とか云う政治的な要求がかげられたことは、これらの諸要求が集中的に労働者階級の政治的要求を表現したものであって、かくてプロレタリア党成立の要求と気運を作り出して行ったのである。」(傍点引用者)

第四章は「労働者階級の政治闘争」であり、「一」の「大正初年の小ブルジョア

自由主義運動と労働者階級」に続いて「二、労働者階級の政治的闘争」があつたかわれ、社会主義運動、マルクス主義運動、アナキズム運動についてのべ「III労働者階級の政党への最初の要望」として次のようにのべている。

「大正初年に、政治的な若しくは、思想的な闘争を、小ブルジョア出身の社会主義者に打ちまかせて居た労働者階級は、ロシア革命による世界的なプロレタリア運動の進展、大正九年の恐慌後の日本の労働者運動の激化によって、急速に自覚し、ここにはじめて社会主義運動が、労働者階級みづからのイニシアチブと組織との下に闘われるようになって来たのである。」(35)

こうして、「労働者階級の要望」で日本社会主義同盟が結成されるが、その中でアナキストとマルクス主義者との対立が激化していった時、支配階級は一九二一年五月二八日同盟に対する解散命令を発し、機関誌『社会主義』は五月号限り廃刊となる事情をのべた後、小川は本論文を次のように結んでいる。

「労働者階級がかく最初に要望した政党は、かくて一方に於ては、在来の小ブルジョア社会主義運動の総括であり、総決算であると共に、この経験は他方に於ては、要望された政党がただマルクス主義を統一的に代表するプロレタリアートによつてのみ建設されることを学ぶに至り十年末から十一年にかけてこれがなされるにいたつた。」(36)

要するにこの小川論文では、階級的結成の時期の評価は今日の私達と若干異なる点もあるが(とくに「明治三十年代」の評価で異なるが)、私達の依拠している、方法論的概念は基本的に揃っている、といつて差支えないであらう。

3 西雅雄「最近における階級的諸運動」

本稿は、筆者が山川均門下「三羽鳥」の一人といわれた共産党創立運動の中心的部分でもあつた人物の書物であり、日本共産党史をはじめとする階級的諸運動について貴重な叙述をなしている部分が少くないことについては、筆者はかつて「第一次共産党」結成の部分について、二村一夫氏の示唆に基き指摘したことがあるが、他にも実証的にも理論的方法論的にもすぐれた指摘が少くない。今回改めて読み返してみ、改めてその感を深くする。紙数の関係で一部分のみをあげておこう。たとえば日本労働組合評議会の分裂問題にしても、前年に書かれた松

岡稔(田中長三郎)『日本労働組合運動発達史』、磯村秀次(谷口善太郎)『日本労働組合評議会史』を史料として利用しながらも、両書にはない「三、総同盟分裂の批判」の項目を独自にたて、次のように当時の左翼の誤謬についても明白に指摘している。

「総同盟分裂の責任は勿論右翼幹部にあつたけれども、当時における左翼の未成熟のために、飽くまで組合内部に踏み止って内部から改良主義幹部と闘争し、一般組合員大衆を左翼の倒れ獲得すること、それがためには充分弾力性ある下からの統一戦線政策を取らねばならないということが徹底せず、総同盟を「官僚化し、随落した最高幹部等の手から奪還」四月末革新同盟加盟三十組合連署の声明書から)する正しい方針をとりながら、あまりに焦つたために、比較的急速に革新同盟が除名され、分裂し、評議会が創立されたのであつた。後に福本主義が抬頭するに及んで、この分裂は単純に合理化されたのではあつたが、当時の指導者はあくまで分裂に反対の方針であつたのである。然るに恰もこの五月、……〔上海会〔議〕が〔開かれ分裂反対が決議されたが〕、その指導は徹底しなかつた。ここにも〔前衛党〕缺如の償い難(い問題点が指摘)……される。〕(一)内は伏字を私の想像でうめたものである。重要な叙述なので読者の便宜を考えて敢て試みた」

(6) 講座以後

講座執筆の小川信一、羽仁五郎らの研究は発禁に付され、かつ羽仁らが一九三三年九月講座刊行終了後逮捕されたりなどして、発表の自由は極度の困難を迎える。その中で『歴史科学』や『経済評論』『唯物論研究』などが、マルクス主義歴史学の発表舞台となつて、『講座派』マルクス主義歴史学が、マルクス主義社会科学から分化するが、極度の言論弾圧下では、階級闘争史研究の発表は極めて困難であり、各人はサークル形態での研究に移らなければならなかつた。『講座』を支えたプロレタリア科学研究所、産業労働調査所などは一九三三年九月に弾圧によつて消滅させられ、『歴史科学』などが細々と発表舞台とならざるをえなかつた。『歴史科学』誌で、百姓一揆の事例研究を最も多く発表しているのは、田村栄太郎であろう。又「土一揆を如何にみるか」を山部好吉が書き、土一揆を階

級闘争とみない説を批判しているのが目につく。また平野義太郎が「秩父事件―その資料と検討」⁽⁴¹⁾を発表し、従来のブルジョア史家の理解を批判し、事件の主体を「貧農、小作人ならびに、自家耕地を頂入れせざるをえなくなつてくる勤勞農民」としている。これらの農民が主動して、「自由党左派の個人が、これによつて前面に押し出された」のであり、「自由党が利用したのではない」ことを論証している。

しかし、総じて、この『歴史科学』には、階級闘争史を扱つたものは、以上のものぐらいで、社会構成史関係のものが圧倒的に多かつた。それは、一つは現実の階級闘争の波が、一九三二年九月の日本帝国主義の中国侵略以来、弾圧と検閲も加つて退潮したという現実の反映であり、そこから「静的」な社会構成の分析・確定が歴史科学研究の主流をなすに至つた、と考えてよいであろう。その意味で、土井氏が指摘するように、『歴史科学』には階級闘争史が少なく、社会構成史研究が圧倒的であつた、といえよう。⁽⁴²⁾

早川二郎『日本歴史読本』(一九三四年、一九三七年増補改訂版)では、国家の成立時の階級闘争の叙述もなく、精々「部民制の行詰り」という説明がなされるのみで律令制から庄園の発生に至る班田農民の闘争の説明もなく、「室町時代」に入つて、「第四章高業資本の発生及び発展の時代」に入つて始めて、階級闘争がとりあげられ、「第三節農民及び都市民の反抗」として、「土一揆及び徳政一揆」がとりあげられているがその叙述は、十頁にすぎない。徳川時代の叙述でも、「農民の動向」としてその後半期に農民一揆が頻発している。「とのべてあり、都市民の動向」として都市の「打こわし」と「ええじゃないか」にふれているがそれは専ら羽仁五郎氏の『講座』の成果に依拠している。慶応二年の一揆、打こわしの昂揚についての記述もほとんどなく、(一行のみ)、維新変革期と明治初年については、「明治初年農民騷擾録」によつて、農民騷擾事件について「世直し」として「明治初年のブルジョア民主主義運動」として農民の運動を記述しているにとどまる。

このような戦時中であつて、律令制下の農民闘争としての「逃亡」の歴史的意義を明らかにしたのもとして北山茂夫の「奈良時代の農民問題」⁽⁴³⁾その他がある。

また、山城の国一揆や土一揆や中世の逃散の意義を明らかにした鈴木良一の業績があるが、それらは戦時中としては例外的なものだった、といえよう。

三、戦後における階級闘争史研究の歩み

1、二つの学派

敗戦による言論の自由の回復によって、一九四六年から四八、四九年頃迄、マルクス主義史学者の業績が続々出版されたが、ほとんど大部分が、戦前の書物の再版か戦前、戦中に公刊した論文を集録したものか、戦時中書きためたものを公刊したものであった。この問題点については、既に遠山茂樹氏によって、「戦時中の仕事がそのまま戦後の指導的役割をもつというのは、戦前と戦後の歴史的断層の広さと深さとが、まだ歴史学の学問的課題にまで結晶していなかったことを示唆している。」⁽⁴⁵⁾として指摘されている。そして私も、この戦時中の仕事について、多くのマルクス主義社会学者が転向した中で、渡部義通氏、羽仁五郎氏の夫々を先頭とする二グループが抵抗したり、研究を継続した意義について明らかにしながらも、困難な歴史的条件の与えた制約から、羽仁の場合、ブルジョア民主主義、自由主義史学と渡部グループの場合、ブルジョア的社會経済史学との一定の妥協をうまざるをえなかったという制約について指摘したことがある。

この「制約」こそ、階級闘争の観点の弱さであるといえよう。羽仁の「制約」は、一九四〇年に『中央公論』に発表された『明治維新』の戦後での公刊が、林基氏によって批判されるという形で問題になった。この林の羽仁批判については、既に私は論じたことがある。⁽⁴⁶⁾また渡辺グループの「制約」については、鈴木良一の「敗戦後の歴史学の一傾向」という批判及び、鈴木、石母田論争がある。

それにしても、この戦後の時期にもこの論争に見られたように、社会構成史に重点を置くか、人民闘争Ⅱ階級闘争に重点をおくかについての相違が一応あったことはたしかであろう。その点はこの当時書かれた通史を見るとはっきりする。伊豆公夫編の『日本史入門』(四七年)では、古代史を藤間正大が、中世史を石母田正が執筆しているが、藤間執筆の部分で、班田農民の逃亡については全くふれられず、次のように叙述されるのとどまっていた。「庄園の奴隷は土着して、支給さ

れた一定の土地を耕しているうちに、しだいに土地を占有権をえてきた。……中略…… 奴隷所有者と奴隷の間に争いがおきた。この争いは奴隷にとって大変な困難なものであったが、彼等は一步一歩前進して、名主というものになった。⁽⁵⁰⁾これは、石母田正『中世的世界の形成』に基づく叙述といえよう。そして、「武士階級は、全く無気力、無能力になった奴隷所有者的な貴族Ⅱ官僚を打倒して、自分の政権を確立し、しだいに形成されてきた封建的關係を社会全体に普及させる方向に向った。」と述べている。

これに対し、井上清『くにのあゆみ批判Ⅰ正しい日本歴史』は「解放のたたかい」という項目をもうけ、班田制下の人民生活の窮乏についてのべ、「こうした生活にわれらの祖先は甘んじなかった。彼らはわりあてられた土地をすてて逃亡した。……中略…… 一方に良田があれ地になり、一方に森林原野が開墾される。この矛盾こそは、発達した生産力が古い生産關係と矛盾していることの一つのあらわれである。……人民が逃亡したからこそ、班田制はくずれたのである。貴族や富家の開墾ができたのも、人民が『公民』という国家のどれいあるいは農業奴隷の状態から解放されようとして、にげ出したのでこれをやとら入れたからである。こうしてだんだん土地の私有が発展する。」⁽⁵¹⁾

北山茂夫の戦時中の研究成果に依拠しているのは明らかであろう。だからこそ、井上は戦後の歴史学の傾向について次のようにのべていたのである。

「旧来の天皇主義的非科学的性格をばくろ反駁するという点では、まず十分だったが、積極的に人民の歴史を明らかにするということでは不十分だった。ことに歴史が勤勞生産者と搾取者の階級闘争であるということよりも、社会の経済的構成の解説に多くのひとが、あいかわらず努力していたことは啓蒙というてんばかりでなしに、最も根本的な理論問題としても十分に自己批判されねばならないと思います。」⁽⁵²⁾

同様の批判は、羽仁門下の鈴木良一の「敗戦後の歴史学の一傾向」にもみられる。このように、戦後の歴史学にあつて、階級闘争の見地を重視したのは、羽仁五郎の学派、井上清、鈴木良一、北山茂夫らであった。そして通史を執筆して、日本人民の階級闘争史を書きあげたのは、羽仁、井上だった。そこで羽仁の功績

と共にその問題点をも次に明らかにしたいと考える。そこに、今後の階級闘争史研究のあり方をさぐってみたい。

2、羽仁五郎の研究

こうした、人民闘争、階級闘争重視の観点から、羽仁は、『転形期の歴史学』や『歴史学批判予説』などを再刊すると共に『日本歴史の特殊性』や『天皇制の解明』などの日本史の総説とでもいうべき論文を発表し、『新しい日本歴史テキスト』として『朝日評論』に連載を開始し、『百姓一揆の話』（『文化評論』）や『明治維新における革命と反革命』などを発表し、やがて、『日本人民の歴史』（『日本社会の基本問題』のち岩波新書）という通史を完成し、歴史理論書として『歴史』（一九四八年、岩波書店）を発表した。また、戦時中執筆した原稿を『都市』や『イタリヤ社会史』（『日本における近代的思想の前提』などとして発表すると同時に、『クロオチエ』、『ミケルランジェロ』などの戦時中の著書をも再刊した。しかし、なぜか、『日本資本主義発達史講座』の諸論文は再刊されなかった。戦時中の著書と戦後の諸論稿には通じるものもあるが、同時に講座の諸論文との一定の異和感を感じるのは私だけであろうか。羽仁自身次のようにのべている。

「ぼくが一九三三年につかまっていたときの結論は、いままでの歴史学ではだめだ、新しい歴史学を発見しなければならないということだった。だから、『日本資本主義発達史講座』などにぼくがかいた論文と、そのあとで一九三三年にぼくがつかまっていたあとで書いた『明治維新』とか『ミケルランジェロ』とか『白石・論吉』とかは、全くちがうのだ。」⁽⁶³⁾（傍点引用者）

この「全くちがう」あたらしい歴史学とは何であろうか。この点をさぐる一つの手がかりとして、一九三三年秋留置場で書いた、『警察手記』（『思想研究資料』三四年三月）がある。警察権力の強制で書いたもので、羽仁の真意が正確に反映しているとはいえないものであるが、以下にみるようにその真意の一端をさぐることも全く、不可能ではない、というのが私の結論である。

羽仁の手記は次のような構成から成っていることを先ず紹介しておこう。

一、史観に如何なる種類があるか

序節 史観、反歴史の見解、歴史主義

1、史観と反歴史の見解との差別

2、史観と歴史主義との差別

本節 史観の種類

I 論理上の特徴より見たる史観の種類

1、史観はその原理論上の観点により

2、史観はその方法論上の観点により

3、史観はその内容論理の上より

II 史観の史的発達より見たる史観の種類

1、古代史観

2、中世史観

3、近代史観

結論

科学的史観

二、本人の正当と認むる史観を問う自分が其の史観を把握する理由

前節、後節、結語

三、日本歴史に於ける唯物弁証法の発展の典型的なる実例の二、三の説明

前節、後節

一、では、史観の種類についての説明を行い、結論の部分で、「吾人の求むべき史観は、最後に現在の新しい総合に基づく『科学的史観』ならざるべからず。」とのべている。そしてその「要点は」として次のようにのべている。

「イ、従来各史観が各その立場より論究解明せるところを、それら各立場の強調を揚棄して科学的立場より撰取・総合・ロ、特に史観の発展上、高度の発展を示せるところある觀念弁証法的史観と唯物弁証法的史観とに於いて論究究明せるところを正しく評価、即ちそれらの各立場の強調を揚棄して、之を科学的立場より撰取、総合、ハ、但し、特に觀念弁証法的史観が専ら史観の歴史哲学の立場を守れるに反して、唯物弁証法的史観、唯物史観がその史観の歴史哲学的立場を共産主義、マルクス、レーニン主義的の実際政治的立場に結べる点に対しては、科学

的立場より厳密なる批判を加え、その理論より實際への狂信的飛躍と一面的強調とを指摘排斥せざるべからず。……」⁽⁵⁴⁾

これに続けて、より具体的に唯物史観の意義と批判を詳細に行っているが、次の二の部分と重複するので、ここでは省略しよう。

二の前節では、従来唯物史観を正当として来た理由を三点にわたつてのべている。そして後節では、次のように唯物史観を批判している。「されど一層精密に反省考察するに、右の如き唯物史観の主張、強調は実に妥当にあらずとせざるべからず、唯物史観が従来の史観を出でて一層優秀なる構成に成功せる点あると共に、他方では従来の史観の建設せる所に及ばざる点も亦存在すること看過すべからず、就中、マルクス、エンゲルス、レーニン等による唯物史観の確立に精鋭ありとするも、唯物史観が、マユクス乃至レーニン等により建設主張されし間にまた後に於ける一般的進歩は、史観の唯物史観以上の一層の進歩をまた当然に要求し、即ち唯物史観の一層の精磨洗練か或は更に新しき一層進歩せる史観の建設から要求し居るとされざるべからず、私共は嘗て唯物弁証法的史観を優秀精確正当とし、その鋭利を主張せりとしても、今やこの唯物史観に対する批判を要求し、更に一層高度の進歩せる科学的史観を要求せざるべからざるの理由を有することを明らかにせねばなりませぬ。」⁽⁵⁵⁾

このべて、具体的に次のように唯物史観への具体的な批判を展開する。

「先ず、唯物史観批判の要求を現実 realism に実証するものは、第一に、何人の眼前にも顯著なる唯物史観の現段階に於ける凝固停滞の固化なり、……最近ソビエト・ロシア、コム・アカデミー関係等より、つぎつぎに編纂公刊される唯物史観の概論等、代表的なるもののみをとりても既に数種に上れるが、此事は何れもその公表に当りては一の進歩を示せるものと推薦されつつ、しかも暫くにしてその誤謬を指摘され、排斥され、更に新たな編纂公刊を見、再び先ず推薦、次で批判排斥をくりかえすというが如き事実も亦偶然にあらず、ここにも唯物史観の見解の行詰りを例証するものありともいへし、唯物史観に於ける新しき見解がかくも動揺甚しき他面に於いては、また最近唯物史観論者の中に、唯物史観に対する討論批判の自由抑圧さるる傾向現れ居るも、亦実は却つて唯物史観の行詰りを実証す

るものなり。最近唯物史観に立つものが、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリン等の名の権威と、それらの権威の典拠からの引用の権威とに依つて、唯物史観に関する討論を、科学的に解決せずして、却つて権威の力を以て圧倒せんとする権威主義の偏向強く、又唯物史観に対する批判に科学的に答えずして漫罵する罵倒主義の傾向強き等、また唯物史観の見解が最早自由なる展開を得ず行詰れるを示すに外ならず……」⁽⁵⁶⁾ (傍点引用者以下同じ)

このような権威主義、罵倒主義の指摘は、ある意味で「スターリン主義」批判の先駆であり、この手記がすべて、権力の強制によるものだけでなく、羽仁の真意をも一部反映している側面をもつものであり、この点は羽仁の鋭い指摘といわなければならぬのではなからうか。これに続けて、以下唯物史観について次のような批判を行っている。

「第一には、全体として、唯物史観が一の理論たらんしながら、理論が当然認めねばならぬ単に歴史的たる以上の観念的価値、真理、正義、愛、倫理、信仰等の精神性の独自の意義を、歴史原論上にも歴史方法論上にも歴史内容論上にも、暗黙の中に前提する如くにして実は無視するか或は公然之を否認し、かくて唯物史観は自ら理論(即ち精神)として自ら立つべき原則を無視し、実は自殺に陥り居る点なり……」⁽⁵⁷⁾

「第二は、更に唯物史観の内容の個々の主要点として、イ、所謂生産関係の公式的把握、ロ、観念形態の独自の意義及び構成法則の無視、ハ、理論としての唯物史観の現実への性急飛躍なる適用、此等について唯物史観の停滞特に此判を要するものあるを注意せざるべからず……」⁽⁵⁸⁾

三として、日本歴史に唯物史観を適用した事例としての原始共産制、古代奴隸制、中世農奴制、近代賃労働、資本制の発展段階の指摘につき実証的にも不充足さがある点を指摘している。以上が心にもない作文であったことは羽仁の戦後の業績が示している。

以上の点を指摘しながら、次のように結論している。

「結論するに、唯物史観は、物質的生産関係の分析には鋭利なところあるも、第一には、かかる物質的生産関係が爾余各種の諸条件(自然的、地理的乃至観念

的、精神的等の諸条件)の下に如何なる変差を被るか、即ち現実の歴史に於いては如何なる豊富なる多様性が展開せらるるかを認識する能はざる公式主義に立ち、第二には、唯物史観は所謂物質的生産関係がその上部構造なりという観念形態を規定する点のみを強調し、観念形態がしかも独自の意義と構成法則とを有し、従って却つて観念形態が物質的生産関係に作用を及ぼし規定を及ぼし、かくて現実の歴史にはあらゆる変差乃至諸特殊事情を伴う豊富なる多様性が展開せらるるの過程を認識する能はざる限界あるにより、一般歴史段階説等の唯物弁証法的発展観に於いても一面鋭利なる貢献をなしつつ他面学術上科学的史観より全く妥当ならずとせざるべからざる点を存し、その日本歴史に於いて唯物弁証法的発展の典型的実例を認識主張するも若干の点に於ける鋭利の分析あるも全体的には妥当ならずとされざるを得ざる所以なり。(終)⁽⁶⁰⁾

この「手記」は、権力への屈服で、「心にもない」(羽仁説子『妻の心』八五頁)唯物史観批判を展開しているのが基本であるが、当時の内外のマルクス主義陣営についての羽仁の不満が一部展開されている点もないではない、といえよう。この「手記」を書いて起訴留保処分になった羽仁は、以後マルクス主義史家ではなくて、「科学的史観」の持主としての外形での執筆活動をせざるをえなくなつたのである。この時期のことについて羽仁自身は、「われわれを辱かしめる鉄の鎖から、われわれは輝く剣を鍛えだすのだ」というドイツ農民戦争の旗の言葉をあげながら、次のようにのべている。

「ぼくは一九三三年昭和八年に最初に逮捕されたのですが、牢屋から出てきて、これからさきにこの現代にどう生きるか、ぼく自身歴史学によってどう生きるか、なやみ苦しみました、そのときぼくはこの言葉によつてはげまされ、立ちなおつたのであります。」⁽⁶¹⁾

「発達史講座をやっている頃までは、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンばかり読んでいた。その一九三三年につかまってきて、自分が勉強しなおさなければいかんというので、さっきの意味で、学者がつかまって牢屋に坐わっているのが目的じゃないということから、自分の勉強をまったくやり直そうとしてやったのが、福沢諭吉の全集を読むこと、それからマンチエスター・ガーディア

ン、ジャパン・クロニクルなどの新聞を読むということ、これは効果があつた。ぼくの学問は非常に変つてきたということじゃないかとおもう。」⁽⁶¹⁾

「ぼくの『明治維新』はぼくの警察の留置場の体験によつていまいかにきたえられなければならなかつたか。その出発点となつた、鈴木政太が留置場のなかでぼくにおしえたかれら労働者とわれらインテリゲンツィアとの関係を、ぼくはその後一年のあいだにも考えつづけていた。それとやらんで、ぼくはぼくの留置場のなかでもくずれなかつたぼくの歴史学の最低線ならば、これからはぼくはぼくが出来るという自信があり、ファシズムと戦争とが進行してきても、これに対してぼく自身がふみとどまつて反撃するよりどころがそこにあり、そして、また、それからぼくの歴史学が確実に発展することが保障される、と考えられる。そういう最低線をどこに見いだすか、さぐりつづけた。こうして、ぼくがぼくの『明治維新』によつて解明した理論は、このおなじ年にヨーロッパにあらわれてきた人民戦線の理論の方向に立っていた。ぼくはそのときまだデイミトロフの理論など知らなかつたけれども、それとおなじ方向の理論を考えていたのであつた。」⁽⁶²⁾

こうして、一九三五年五月、『明治維新』(岩波講座『日本歴史』所収)が刊行されたが、それは必ずしも唯物史観でなく、羽仁の「歴史学の最低線」、「科学的史観の上に立つ」という外形をとつたものであつた。(戸沢検事に提出した、という)この論文には、したがって、マルクス、エンゲルス、レーニンの直接の引用はない。これ以後、敗戦迄羽仁の著作活動は第二期に入る。いわば、反戦、反ファシズムの人民戦線史学の道といえようが、この時期の羽仁の評価には諸説があり、かつて私は次のようにのべたことがある。

「この期の羽仁を、簡単に『自由主義ブルジョアジー』の史学と見る服部(之聴)のような考えは、その『表現』からだけ、階級規定に還元する、フリーチエ流の『芸術社会学的』偏向(蔵原唯人『国民の文化と文学』六三ページ、評論社)と同一のものといわなければなるまい。その上で、マルクス主義のとらえ方の問題として、服部の羽仁批判は受けとめなければならぬだろう。そのためには、服部の『歴史論』をはじめとする著述と、羽仁の本書所収の歴史理論、その他の著述との詳細な比較研究が必要であろう。今私に、それを果す余裕も力もない。

ただ、羽仁の著作の場合、高田が『今日の眼からみれば、そこにも何ほどの奴隷の言葉がみられるといわれるかもしれない、またそれとともに若干の逸脱、あるいは逸脱と見えかねぬようないい方、一面的な表現が箇々にも見出されもしよう』(同前)といっている問題に取組まなければならない、ということが、私にはいえるだけである。そして、それは『しかし私は、それは誇るべきたたかいのしるしだと思ふ。それはショウウインドウの中に品よく飾つてあつたり、アカデミーの一室に静かにおかれていたりするような記念碑ではなく、硝煙にまみれ、弾痕をさえ残しているそのような『記念碑』なのである。(同前)』というだけでなく、今日われわれがマルクス主義を発展させるためには、その記念碑の意義を十二分に評価しつつ、その『弾痕』についても、科学的分析、評価を加える必要がある、と私は考えるのである。それは、この『弾痕』が、『表現の自由』をえた戦後の羽仁の理論活動に一定の影響を与えているか、どうかがつぶさに検討されなければならない、と私は考えるからである。⁽⁶³⁾

この指摘をもう一步、ここでは深めてみたいので、この解説の時期にはあえて触れなかった、警察手記について詳細な紹介をあえて行つたのである。つまり、『弾痕』についても明らかにしてみようと考えたからである。前に紹介した『手記』が『弾痕』であることは自明であろう。

ところで、羽仁の戦時中の労作であるが、その反戦、反ファシズムの偉大な抵抗の立場について疑う者は誰もいない。藤田省三など、日本思想史上福沢諭吉と並ぶ「大秀才」として高い評価を与え、「マルクス主義者としての羽仁と自由主義者としての羽仁が見事に統一されている」としている。⁽⁶⁴⁾ 服部之穂は、「自由主義ブルジョアリーの史学」⁽⁶⁵⁾として、高田求は、この藤田、服部の評価は、結局羽仁がマルクス主義の立場から自由主義の立場へ移行したものとみなすことになるとし、あくまで「マルクス主義の純化ないし、現実化、具体化、血肉化」とみるべきである、としている。私はこの高田の指摘を継承して前述のようにのべたのである。では、羽仁が、「一九三三年とくらべて、私の学問は全く新しくなった」という意味は、どうとらえるべきであろうか。私は『手記』の「奴隷の言葉」の中にもみられた、ソヴェト・マルクス主義への批判、つまり、スターリン時代のソ

ヴェト・マルクス主義⇨スターリン主義の批判、公式的マルクス主義の批判を重視したい。一九三三年以後、羽仁が克服しようとしたのは、スターリン主義ではなかったか、と考えたいのである。そして特に、経済主義、経済基礎還元論であったといえよう。この点は、特に羽仁の仕事が国学、白石、諭吉など日本思想史の分野、ミケラアンジェロ、ダヴィンチなどのルネッサンスの研究など上部構造の分野に集中していた点に見られると考える。この点は、一九三八年末執筆の「歴史学」(公表は戦後)そして戦後一九四〇年執筆の「歴史」などをみれば明らかである。

この「歴史学」は、「歴史学は、批判的研究によつて民衆を歴史虚偽よりまもり、歴史的真実をあきらかにし、民衆が社会の歴史的変革の真理の獲得によつて健全なる自覚をたかめ現実現在に明朗に前進する力をたかめることをたすける科学である。」と規定している。羽仁がこの規定をする上で、大きく影響しているのは、フランスのブルジョア共和主義史学の、ラングロア、セイニヨボスの『歴史研究入門』であることを明言し、その言を引用している。

そして、唯物史観については、次のようにのべている。

「いわゆる唯物史観乃至弁証法的唯物論的史観が周知のようにマルクスおよびエンゲルスによる創始的研究により『資本論』以下また近くはプーハリンの『史的唯物論の理論』およびその後の発展等により歴史および歴史学に寄与したところ大なるものがあつたことはいわゆる立場からいえば全く別の立場に立っていた硯学トレルスがその名著『歴史主義とその諸問題』にもっとも詳細に論じたところでもあつた。……」⁽⁶⁶⁾

このように唯物史観を高く評価した上で、次のように指摘している。

「時代の社会関係の理解なくしてその芸術の十分なる理解はなく、生産関係の分析は歴史および歴史学にとつてきわめて重要であるが、社会関係の理解だけで芸術上の制作も理解もできるものではなく、生産関係の分析だけで歴史および歴史学は終わるのではない。歴史および歴史学は歴史観の単なる適用であつてはならない。……」⁽⁶⁶⁾

ここには、経済主義への批判があり、或る意味で「手記」にいう「科学的史観」

がのべられている、ともいえよう。とも角、唯物史観Ⅱ史的唯物論Ⅱ歴史観と歴史学の区別と相互関連の見事な指摘がなされている。このようなマルクス主義者が陥り易い経済主義への批判、歴史学の独立性の指摘が、戦争に対する平野義太郎、山田盛太郎らの態度との対照的な反戦、反ファシズムの立場を羽仁に守らせたのであろう。この翌一九三九年羽仁が『ミケルアンジェロ』を発表していることを考える時、ここでの芸術についての指摘が見事に生かされたというべきであらう。

このような経済主義、客観主義への警戒、批判は、戦時中の平野らの戦争協力を見て、一層確信がもたれ、一九四七年の『歴史』での次のような発言がある。

これは「歴史とは、われわれの生き方である。歴史学とは、われわれの歴史的な生きかたの理論である。」という文章から始まり「われわれが歴史的に生きるには、われわれは歴史の見とおしをもたねばならない」とのべ、そのために「理論をもたねばならない」とし、その理論が、本や学校や講義の中にある、とするのは観念論であるとし、マルクス理論についても次のようにのべている。

「その学者のつくった索引などを見ると、マルクス自身も自分がこれこの概念や規定をどの著述また論文のどこそこどこそこで使ったか、この学者ほど知らないだろうと思えるほどである。しかし、これが、その学者自身にとって、はたして理論であったかどうか。……ところが、その学者は、その後、日本帝国主義の『大東亜共栄のアジア解放の聖戦』の勝利を確信しそれに奉仕し、彼の見とおしのまったく誤っていたことを明らかにしたところをみると、彼は何らの理論をもっていないのである。……」

それらのいわゆる学者の日本資本主義の機構とか日本経済史の研究といったものが、実は、何らの理論的研究ではなく、マルクス主義とか唯物史観とかいっても、実はその便利出版であり大塚巧芸社版にほかならなかったことがわかるのである。……」

この批判が、『大アジア主義の歴史的基礎』の平野義太郎と『日本国防国家の史的建設』の土屋喬雄に対してのものであることは、明白である。このような批判に続けて、歴史の法則があげられる。第一法則として歴史が動くものであり、歴

史は変革であり革命であること、第二法則として、歴史の原動力は人民であること、第三には、その歴史がどう動くかは、その人民の組織がそのときの程度のものであるかによつてきまるとして、歴史の三大法則としている。これらを鋭くとき、幣原内閣を打倒した日本の労働組合員と羽仁との問答が羽仁の体験を通してのべられているのが特徴的である。ここには、普通の「史的唯物論」教科書に述べられているような、生産力と生産関係の矛盾、その階級社会での表現としての階級闘争、といった表現は使われていない。もちろん、羽仁が、この原則を否定していないことは、先の「歴史学」での指摘、この『歴史』をほぼ要約した形の「歴史とは何か」で、土台の上部構造の規定性についてのべていることからあきらかである。ところが、ここでは、歴史を動かす人民の力を中心に叙述されている。このような表現から、羽仁の歴史観を「人民史観」と呼び、唯物史観からの逸脱、主観主義化を云々することもできるが、羽仁の真意は、既に指摘した「転向」理論につながった平野、土屋らの経済唯物論的、経済主義的で静的な歴史観の克服にあり、歴史の原動力としての人民の力は、無限定な主観主義的なものでなく、人民の組織の程度如何ということで、人民の主体的能動性に一応の客観的限定がなされていた。ここには、歴史における客観的法則性と主体的能動性という史的唯物論とマルクス主義歴史学の鍵となるような中心的理論問題をやさしく説こうとする羽仁の苦心があつたことを見落してはなるまい。だからこそ、羽仁は『日本人民の歴史』の「まえがき」で次のようにのべていたのであろう。

「人民の立場が、いまだに日本では確立していない。しかるに、現在、日本においても、すでにプロレタリアートの問題が起つていゝ。そこで、プロレタリアートの問題の解決において、人民の問題も解決されなければならないのであるが、人民の立場が確立していないために、官僚主義的に処理される傾向が、日本ではとくに強く、それが日本における官僚主義大学教授たちのグループのマルクス主義や、いわゆる新官僚や、また、それらが、ファシズムまた日本帝国主義のいわゆる『東亜解放』の使命などというドクトリンへ傾斜していった事実などにも強くあらわれていた。……」

最近の日本の歴史は、毎頁毎に社会とか経済的基礎とか生産様式とか科学的分

析とか具体的把握とか厳密とか範疇とか系譜とか機構とか、やはり四角の文字がジグザグと書かれているが、やはり「人を食う」ものにほかならないかもしれない。」⁽⁷²⁾

ここには、戦時の『転向』マルクス主義だけではなく、戦後「復活」した、経済唯物論的なマルクス主義や、『近代資本主義の系譜』を書いた大塚史学への批判も見られる。羽仁の問題意識が、客観主義の克服、プロレタリアートの前に支配者と対決する人民の立場に立つことの重要性の指摘にあったことは確かであろう。

しかしながら、この人民の立場の強調、人民の組織の程度如何という問題を支える客観的物質的基礎、生産力段階への言及が少なく、普通に史的唯物論で説かれる生産力と生産関係の弁証法、その階級社会での表現形態としての階級闘争などについての説明の不十分さがあったことも否定できない。『プロレタリア歴史学概論』など戦前以来の羽仁の労作全体の中に位置づけて読みこめば別であるが、このパンフ一冊のみを読んだ場合、林基が、岩波新書『明治維新』を批判した際、使用したレットル「人民主義」的偏向がうまれる危険性もないわけではない、ということになる。この点で、戦中、戦後の羽仁史学については、鈴木良一の次のような指摘は、ある程度当ておき、批判者たちの批判もまったく見当外れとはいえず、羽仁の弱点をついた一面をもつていた、と考える。しかし、戦中、戦後の羽仁史学を直ちに、ブルジョア自由主義史学と位置づけるのは誤りで、マルクス主義史学、科学的歴史学の創造的発展への努力の中での部分的欠陥、とくに経済主義的客観主義的偏向克服の努力での模索の中での試行錯誤として位置づけるべきだ、というのが私の結論である。

鈴木良一は、戦後の羽仁史学について、次のようにのべている。

『明治維新』(岩波講座『日本歴史』)によってやはりすぐれたマルクス主義歴史家のひとりであることを示されたにもかかわらず、そして戦争中あれほどまで身をもって戦争とたたかわれたにもかかわらず、敗戦後やかましく専政支配者対人民の対立闘争をさげびながら、その人民たるや自身どんな構造をもつのか、どんな生産関係において支配者とどんな関係をむすんでいるのか、どんな条件のもとで支配者と闘うのか、さっぱり分らず、要するに氏の『人民』は超歴史的なも

のにすぎない。しきりに自分こそ人民の友であることを上からおしつけるような調子で書かれるにもかかわらず、というよりはそういうことをとりたてていなければならないほど、実は急進的な自由主義者として人民の組織に直接にむすびついておられないからである。」⁽⁷³⁾

羽仁についての「急進的な自由主義者」というレットルは必ずしも正しくなく、私はマルクス主義者と考えるが、『歴史』をはじめ戦後の羽仁の啓蒙的論文の欠陥を鈴木が鋭く指摘していることはたしかであろう。

以上のような一定の弱点をもちながらも、羽仁五郎は、『朝日評論』誌上に「新しい日本歴史テキスト」の連載をはじめ、四六年四月号、九月号、一〇月号に、原始社会から大化改新迄をつづけ、十一月号以降羽仁の教えをかってうけた人々によって受けつがれ十一月号に今井林太郎「武家社会の成立」、四七年新年号に大竹正三郎の「中世社会の現実」、二月号今井林太郎「近世社会の黎明(一)」、六月号に同「近世社会の黎明(下)」が掲載された。これに続けて、羽仁は、一九四九年には、太平洋問題調査会編の「日本社会の基本問題」に、「日本人民の歴史」つまり、原始社会から敗戦迄の現代社会迄の日本歴史の通史の執筆を完成し、やがて岩波新書に収録されて流布し、外国語訳が多く出され、社会主義国にも流布している。一冊にまとめられた簡潔な日本通史として、人民の階級闘争を中心にして叙述したものととして、その歴史的意義はきわめて大きいものといわなければならない。そして羽仁の歴史学の長所も弱点も本書の中に集中的に表現されている、といつてよからう。弱点といつても、分量に制限があり、あく迄階級闘争を中心に日本人民の歴史を、新書版一冊程度の分量にまとめ上げた功績が主であり、未だにこれにかわる著述が現われていない現在、それは、あく迄今後の我々の階級闘争史研究を前進させるために、あえて指摘するにすぎないものである。

羽仁の真面目がよく現われているのは、矢張り、人民の階級闘争の見地を、その既に紹介した「人民の見地」の項にみられるように、貫きとおそうとした点であろう。

日本での奴隷制社会の存在についての的確な主張がなされ(九〇―一頁)、次のように明言されている。

「そのあいだに、日本の人民が、こうして氏姓制特権階級のために奴隸として支配されることに対し、しきりに反抗反乱するにいたった事實は、古事記や日本書記などにもあらわれているが、これらの奴隸反乱に対し、貴族豪族は個々別々ではそれらの奴隸反乱としての人民の反抗を屈服できなくなるとともに、ついにこれらの貴族豪族が連合して、この日本人の奴隸反乱を圧倒しようとした。この日本人の反抗としての奴隸反乱の弾圧のための豪族連合、ここに日本の古代の天皇制の起源があつたのである。」⁽⁷⁴⁾

この点の指摘は、あく迄階級闘争の見地を貫こうとする羽仁のすぐれた点であり、近年の類書が実証におぼれ、あいまいにしている点ではなからうか。

また、石母田正『中世的世界の形成』が明らかにした史実も次のように生かされている。

「東大寺の古文書を見ると、東大寺領伊賀国のある村のように、寺の奴婢がはじめ開墾のちにここに土着して村をつくつたものがすくなくない……」その上で次のようにのべている。

「当時の百姓人民は、その生産の基礎において、小規模の農業と、これに家内的に結合された手工業しか知らず、したがってまったく自給自足、したがって、まったく孤立分散して生活していた。……当時の百姓人民は、自分たちがたがいに手をにぎり団結し自分たちの組織をもち自分たちの代表を選挙することも知らず、たまたま大衆行動に出ても、一時的におわり、政治的に意識することもできなかった。」

こうして、当時の律令制の天皇貴族官僚政府による半奴隸的農奴制支配に対する日本人の決定的反抗は、逃亡よりほかありえなかつたのである。⁽⁷⁵⁾

古代から中世への社会変革については、次のようにのべている。

「日本の古代の王朝貴族階級の支配をたおしたのは、新たに興ってきた武士階級である、と武士階級は宣伝し、今日でも、封建主義また軍国主義またおよそ支配者意識したがって官僚主義などの影響の下に、市民的意識または人民意識の自覚の低い学者たちが、そんなふうを考えたりしている。」

事實は、まったくちがう。事實は、王朝の支配をたおしたのは武士ではなく農

民であつた。」⁽⁷⁶⁾

この羽仁の見解は、従来の封建主義的、ブルジョア的史学に対する批判として全く正当なものであつた。またマルクス主義史学でも、鈴木良一が「敗戦後の歴史学の一傾向」で批判したように、藤間、石母田には、中世への変革主体を武士に求めるかのような見解がまわりついていたことを考えると、積極的なものであつた。しかし、反面、王朝貴族対人民の基本矛盾を強調するあまり、古い支配階級王朝貴族対新しい支配階級＝封建領主階級（武士）との副次的矛盾、武士の相対的に進歩的な役割迄否定してしまうことになってしまつてゐる。鈴木良一の場合には、その一定の進歩的役割を認め、武士が農民と共同戦線で闘つた点、下からの革命と上からの革命とが共存したことを主張している。ただし、羽仁の場合、明治維新論では「上からの革命」の共存を認めている点を見ると、このような単純化の一因は、羽仁が具体的に中世史を研究していない点にも求められよう。「日本人民の歴史」は、その後、土一揆、一向一揆、堺などの自由都市の運動、江戸時代の百姓一揆、維新前後の一揆・打こわし、自由民権運動、労働農民運動と一貫して日本人民の闘争を記述している。合法無産政党的の成立や治安維持法反対闘争の記述など特徴のある叙述がみられるが、戦前の研究成果で私が注目した、階級的自覚の段階の方法はほとんど採用されていないのが残念である。羽仁の個別研究論文は、日本史では、日本古代史、近世史、明治維新史にとどまり、階級闘争史も、百姓一揆と打こわしが中心であり、労働運動、社会主義運動に及んでいないのであり、プロレタリアートの闘争については、概説的段階をこえていない、という弱点はいなめないであろう。そこに、戦前の労働者階級を中心とした階級闘争史研究の達成点が生かされなかつた原因があるといえよう。

3、新しい政治史として

井上清や鈴木良一によつて批判された、藤間正大、石母田正らも、マルクス主義者である以上階級闘争を主観的に軽視したのではなかつた。階級闘争よりも社会構成史研究を重視したかみえる「社会構成史体系」も、企画それ自体として、必ずしも社会構成史研究のみを偏重したものではなかつた。

刊行されたものでも鈴木良一「純粹封建制成立における農民闘争」、林基「近世における階級闘争の諸形態」、信夫清三郎「自由民権と絶対主義」がふくまれており、未刊になったものでも、松本新八郎「中世における階級闘争とヒエラルキー」があった事実を考えれば、階級闘争史を軽視していたとはいえず、数量の少さはむしろ講座名のせいであった、といわなければならないだろう。

この林の論文で、彼自身江戸時代前半期の農民闘争を階級闘争として分析するとともに羽仁の『発達史講座』所収の論文の研究史的意義の確認と共に、その方法的批判が、次のようになされている点が注目される。

「豊富な資料をたくみに用いながら、後期一揆の変革的な昂揚を情熱的に描出している点で、羽仁のこの業績はすばらしいものであったが、徳川封建社会の胎内におけるブルジョアの発展を低く評価したために、この昂揚を単に農民の本来もっている革命的エネルギーに求めているという点で服部之聰によってブルジョアジーの指導ぬきの農民一之論だと批判されましたのであった。だから羽仁の場合、農民の本来的な革命性が強弱される反面、何故この時期に農民の闘争が激化するかの理由は具体的に追求せられないのである。」⁽⁷⁶⁾

羽仁氏は、敗戦迄獄中であつて出獄した抵抗の経歴とあいまって、戦後の論壇のオービニオン・リーダーであつたし、進歩的歴史家の代表的人物であり、そこから「歴研クーデター事件」の代表ともされたのであり、既述のように、林の打撃主義的批判をあげたのであつたが、林のこの指摘は、そのようなセクト主義を克服し、適切な評価と批判であつたといえよう。戦後の幕末維新史研究は、林のこの批判の方向に進んだといえよう。それは、羽仁の研究の意義を高く評価し、その継承、発展を志した遠山茂樹の一連の研究の中で、この方向での努力がなされていった。

遠山茂樹「百姓一揆の革命性」はこの方向に沿つたものであつた。それは、次のようにのべていた。「百姓一揆の基底にあり共通するものは、封建的抑圧を排除し、単純再生産をさえ困難にする過重な負担を軽減することであつた。そしてこの抑圧の緩和、負担の軽減の実現の上に耕作農民の手に剰余価値が蓄積され、それを市場に投入しうる可能性を開くものであり、そのことこそが農業における資本主義発展の途を開くことであつた。それは本来一揆が、農奴制、封建的土地所

有制を革命する可能性（いわゆる革命性）をもっているという意味である。しかし一揆の歴史性を考究する場合、そうした抽象的可能性をのみ問題とするのではあるまい。抽象的可能性が一定条件の下で現実性に転化する、いいかえれば一揆の革命性が貫徹される歴史的条件の追究が対象であるわけである。ただしその際かかる一定条件が作り出されることが、また抽象性を現実性へ転化せしめることが、外ならぬ人間の能動的活動、すなわち強訴徒党にたいする極刑の脅威をおかして立ち上る社会的実践的契機を見失つてはならない。」⁽⁷⁸⁾

「百姓一揆の革命性の抽象的可能性は、商品経済の発展、中産者の生産者層の存在による都市と農村をつらぬく国民的規模の農民一揆によつて実在的可能性に転化するとし、幕末には農民戦争の一手手前まで達するが、幕末日本は敵マニユ段階に達せず、英・独にくらべて中産者生産者層の脆弱が地方的発展段階の不均衡性のはげしさと複雑な入りくみ方の条件とあいまって、一揆の規模と力の効果にかなりの懸隔をもたらした、とした。この遠山の見解は、『明治維新』によつてより一層具体化された。遠山はそこで、その執筆の意図を次のようにのべている。

「これまでの経済主義の狭い視界から、全歴史的過程に考察を拡げて、上部構造からの究明と下部構造からの究明が協力し合つて行わなければならない。就中その統一として政治史的考察が不可欠であること、この場合の政治史とは、文化史、社会経済史以前の古い政治史ではなく、政治を経済の深みから、イデオロギーの広さから理解する。言葉を換えれば階級闘争の集中的表現として把握すること、かかる意味での政治史をえがくことによつて、経済史の陥り勝ちな図式主義を脱して、人間階級の生き生きとした姿をとらえる必要がある。」⁽⁷⁹⁾（傍点大丸）

こうして、階級闘争の集中的表現としての政治史が、階級闘争史研究の課題とされるに至るのである。このような新しい政治史の意義は、石母田正によつて、戦後の新しい階級闘争にこたえるための「政治史の課題」（歴史評論「第六号、一九四七年五月号」として提唱され、その『社会構成史大系』所収の「古代末期の政治過程及び政治形態」として具体化されつつあつたものと同方向であつた。その「はしがき」は、その政治史の方法についてのべている。この論文は後述のように、一九五六年刊行の『古代末期政治史序説』に収録されたが、この「はしが

き」は集録されていない。戦後の階級闘争の段階にこたえるための「政治史の課題」（『歴史評論』第六号、一九四七年五月号）として提唱され、その「古代末期の政治過程および政治形態」として具体化されつつあったものであったが、研究史の蓄積が豊富であり、羽仁、服部らの先人の業績の継承、発展、止揚として出現した点で方法論的にも意義深いものがあつた。⁽⁷⁸⁾こうして、戦後の歴史学の階級闘争史研究は、新しい政治史として具体化されようとした。しかし、マルクス主義の陣営に起つた、「五〇年問題」の混乱は、歴史学の戦線にも及び、民族問題の提起によって『国民的歴史運動』が提唱され、新しい課題に直面させられた意義と共に、その政治的偏向によって理論的混乱をうけたことも否定できない。階級闘争史研究の面では、極左冒険主義の影響をうけて、激化形態のような、激しい闘争形態にのみ目を奪われる傾向も現れた。その頂点は、林基の「加波山事件七十周年を記念して」であつたろう。この時期については、遠山茂樹や黒田俊雄の一応妥当な総括があるのでそれに譲ることにする。

一九五五年の六全協での日本マルクス主義の自己批判、一九五六年のソ連共産党二十回大会でのスターリン批判をへて、マルクス主義理論陣営の反省・再生期がはじまる。同じ時期にマルクス主義史学への反省を迫つたのは、『昭和史論争』であつた。この論争については、私なりの総括がある。国民的歴史学運動における誤りを自己批判した石母田正は、一九五六年に、先の「古代末期の政治過程及び政治形態」を中心に諸論文を集めて『古代末期政治史序説』を刊行する形で、新しい再出発を行っていることに、私は注目したい。そしてその刊行をふまえて、『政治史の対象について』（『思想』五七年五月号）を発表するのである。本論文は、おそらく、現在迄の階級闘争の研究方法についての最高の理論的達成であろう。その点について、私はかつて論じたことがある（『歴史科学の課題とマルクス主義』所収）し、与えられた紙数もなくなつたので省略し、本稿の筆をおく。

(1) エンゲルス「カール・マルクスの著作」ルイ・ボナルバートのブリュメール一八日「第三版への序文」邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第二一巻、大月書店以下同じ二五四頁。

(2) マルクス・エンゲルス『共産党宣言』邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第四

巻、四七六頁。

(3) 「マルクスからヴァイデマイヤーへの手紙」一八五二年五月五日付、『マルクス・エンゲルス全集』第二八巻、四〇七頁。

(4) ラルフ・ミリバンド『マルクス主義と政治』、一九七七年、邦訳、北西充、田口富久治、網井幸裕訳『マルクス主義政治学入門』、一九七九年、青木書店、三一頁。

(5) 前同、三一頁。

(6) 「マルクスからエンゲルスへ、一八五四年七月二七日」『マルクス・エンゲルス全集』第二八巻、三〇九頁。

(7) この手紙の歴史的意義については、ドイツ版『マルクス・エンゲルス全集』第二八巻の巻頭に付された、ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所の手になる序文の指摘が示唆的で、拙稿もそれに依拠している。邦訳『第二八巻』^{XXVII} ^{XXIX} 参照。

(8) レーニン「カール・マルクス」^{XXVII} ^{XXIX} 邦訳、『レーニン全集』第二二巻、大月書店版、四五頁。

(9) 林基「百姓一揆史研究おぼえがき」『百姓一揆の伝統』所収、一九五五年、新評論社、三三七頁。

(10) 山口義三『階級闘争史論』、一九二〇年、大鑑閣、一頁。

(11) 前同、二頁。

(12) 土井正興「戦前における奴隷制研究」、野原四郎他『近代日本における歴史学の発達』所収、一九七六年、青木書店。

(13) 林基「百姓一揆の伝統」、三三九頁。

(14) 西雅雄「階級闘争史」『社会問題講座』4、一九二六年、新潮社、一一頁、のち同『階級闘争史概論』（一九二七年、希望閣）に同講座56所収の論稿と共にまとめられる。

(15) 前回、二二頁、単行本化に際し、プハリーンの引用は『史的唯物論の理論』三四三頁であること、レーニンのそれは一九二〇年四月の第三回全露労働組合大会の演説であることが明らかにされている。そして、「プロレタリアートが直ちに団結して

一階級となると考えるのは無稽である。こういう団結の過程は数十年を要するであろう。」(二三頁) という引用部分に加っている。この後者のレーニンの指摘は、一九七〇年代になって、渡辺菊雄や梅田欽治や私達が改めて注目した部分であることは興味深く、西の先見性に改めて敬意を表しておきたい。

(16) 石母田正「古代末期の政治過程および政治形態」下、「社会構成史体系」7所収。一九五〇年、日本評論社、一三六〜一三七頁。「古代末期政治史序説」下巻、一九五七年、未来社、五三二〜五三三頁。「政治史の対象について」『思想』一九五七年五月号、ここで一番まとめて論じられ、身分編制と階級関係の矛盾の追及が各近代の政治史＝階級闘争史の課題と指摘されている。

(17) 横瀬毅八「日本無産階級運動発達史」『マルクス主義講座』二二巻、一〜二頁。(18) 前同一九頁。

(19) 小川信一「日本におけるプロレタリア運動の発生」『プロレタリア科学』創刊号＝一九二九年十一月号、五一〜五三頁。

(20) 前同、五三〜五四頁。

(21) 前同、五五頁。

(22) 白揚社編輯部編『日本共産党小史』一九三一年、白揚社。

(23) 前同、一九〜二〇頁。

(24) 前同、六八〜六九頁。

(25) 前同、六九〜七〇頁。

(26) 犬丸義一「近現代の人民闘争＝階級闘争史の分析方法」(『歴史を学ぶ人々の為に』一九七〇年三省堂所収)、渡辺菊雄『歴史科学と階級闘争の理論』、一九七七年、校倉書房。

(27) 平野義太郎「明治維新の変革に伴う新しい階級分化と社会的政治的運動」一九四〇〜九五頁、のちに「ブルジョア民主主義運動史」と共に、『日本資本主義社会の機構』一九三四年、岩波書店、一一〇頁。

(28) 小川信一(大河内信威)『労働者の状態及び労働者運動史』上、三〇〜三二頁、一九三二年、岩波書店。一九八二年、同書店より復刻。

(29) 前同、三四頁。

(30) この点での官庁統計をこえる労働争議件数がある点については、今日、青木虹二編『日本労働運動史年表』(一九六八年、生活社)によって確定化しているが、その先駆的業績をなすものである。

(31) 前小川論文上、八一頁。

(32) 前小川論文下、四〜五頁。

(33) 前同、三五頁。

(34) 前同、五四頁。

(35) 前同、六八頁。

(36) 前同、七〇頁。

(37) 犬丸義一「前衛」復刻版(1)解題、一九七一年、法政大学出版局、三九五頁のち同『日本共産党の創立』一九八二年、青木書店二六三頁。

(38) 西雅雄「最近における階級的諸運動」、三八頁。

(39) 犬丸義一、日本におけるマルクス主義歴史科学の発達、歴研、歴科協等編『現代歴史学の課題上』、一九七一年、青木書店。

(40) 山部好吉「土一揆を如何に見るか」『歴史科学』第三巻十号、一九三四年十月号。

(41) 平野義太郎「秩父事件―その資料と検討」『歴史科学』第二巻十号、一九三三年十月号。

(42) 土井正興「『歴史科学』と古代社会研究」『歴史科学』復刻版月報、第十号、一九七七年七月付、四頁。

(43) 北山茂夫「奈良時代の農民問題」『社会経済史学』一九三五年四月号「大宝二年筑前国戸籍残簡について」『歴史学研究』一九三七年一月号、「奈良朝の政治と民衆」、一九四八年、高桐書院。一九八二年、校倉書房、所収。

(44) 鈴木良一「中世に於ける農民の逃散」『社会経済史学』第四巻六号、一九三四年九月「応仁の乱に関する一考察」(戦後著書所収に際し「山城国一揆と応仁の乱」と改題、『史学雑誌』第五十編第八号、一九三九年八月号。のち『日本中世の農民問題』所収一九四八年、高桐書院のち一九七二年、校倉書房。

(45) 遠山茂樹『戦後の歴史学と歴史意識』、一九六八年、岩波書店、五六頁。

- (46) 犬丸義一「日本におけるマルクス主義歴史学の発達」(『歴研・前掲外』『現代歴史学の課題』上、一九七一年、青木書店)、九九頁。
- (47) 林基「書評・明治維新」『学生評論』第四巻三号。
- (48) 犬丸義一「戦後日本のマルクス主義歴史学に関する覚書」歴史学研究会外編『講座日本史』10、一九七一年、東大出版会、一二二頁。
- (49) 鈴木良一「敗戦後の歴史学の一傾向」『思想』一九四九年一月号。
- (50) 伊豆公夫「日本史入門」、一九四七年、正旗社、二五頁。
- (51) 井上清「くにのあゆみ批判」、一九四七年、解放社、四五〜六頁。
- (52) 『科学と思想』、臨時増刊号。
- (53) 「八月一日に君は何をしていたか、鶴見俊輔氏との対談」『思想の科学』一九六八年十二月号、「対談・現代とは何か」所収一九六九年、日本評論社、三三四〜三五頁。
- (54) 「羽仁五郎手記」『思想研究資料』第十一輯、『日本共産党に対する批判』、一九七三年、東洋文化社による復刻版、九七頁。
- (55) 前同、一一二〜一三頁。
- (56) 前同、一一三〜一四頁。
- (57) 前同、一一四〜一五頁。
- (58) 前同、一一五頁。
- (59) 前同、一三五頁。
- (60) 「現代に生きる歴史学徒の任務」『羽仁五郎歴史論著作集』第二巻、三七五頁。
- (61) 「対談・歴史学は如何にあるべきか」『歴史評論』一九六二年一月号。
- (62) 『私の大学』、一九六九年、講談社、一九〇頁。
- (63) 「羽仁五郎歴史論著作集」第二巻所収の私の解説、四二二頁。
- (64) 藤田省三「総説」『思想の科学研究会編』『転向』上、一九五九年、平凡社、六一〜二頁。
- (65) 服部文聡「啓蒙家羽仁五郎君の新ユートピアン教条」『服部之聡著作集』第三巻、理論社、二一八頁。
- (66) 高田求「危機における人間像」『唯物論研究』五号、一九八一年春、五八頁。
- (67) 『羽仁五郎歴史論著作集』第二巻、六頁。
- (68) 前同、一二頁。
- (69) 前同、一二頁。
- (70) 前同、二一三〜四頁。
- (71) 前同三一八頁。
- (72) 『日本人の歴史』、一九五〇年、岩波新書、一頁。
- (73) 「敗戦後の歴史学の一傾向」『思想』一九四九年一月号、四二頁。
- (74) 『日本人の歴史』、二二〜三頁。
- (75) 前同、二七〜八頁。
- (76) 前同、三二頁。
- (77) 林基「近世における階級闘争の諸形態」『社会構成史大系』4、一九四九年、歴史学協議会編『歴史科学大系』第二巻「農民闘争史」上、一九七三年、校倉書房、九八〜九頁。
- (78) 遠山茂樹「百姓一揆の革命性について」『評論』一九四八年五月号、『歴史科学大系』第二巻、七三頁。
- (79) 遠山茂樹「明治維新」、一九五一年、岩波全書、一八頁、改版、同頁。
- (80) 犬丸義一「戦後日本のマルクス主義史学について覚書」前提書一五八〜一六〇頁に引用・指摘。
- (81) 遠山茂樹「戦後の歴史学と歴史意識」。II、一九五〇年前後の問題意識の激動。
- (82) 黒田俊雄「民族文化について」『歴研他編』講座日本史』9。『現実のなかの歴史学』第一部所収、一九七七年、東大出版会。
- あとがき
- 本稿は既発表の「階級闘争史研究の方法論」(階級闘争史研究会編『階級闘争の歴史と理論』、一九八一年、青木書店所収)の前半部分であったが、紙数の関係で後半のみ発表した。ここに省略した前半部分の発表の機会を与えられたのを喜ぶ。なお、これは、一九七三〜七四年度、文部省科学研究費の総合研究の一員としての研究成果であることをお断りしておく。また、羽仁五郎氏は、本年六月八日亡くなられた。生前に発表できなかったのが残念である。